

氏 名 相良 啓子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第271号

学位授与の日付 2021年9月28日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史的
変遷—数詞および親族表現に着目して—

論文審査委員 主 査 菊澤 律子
比較文化学専攻 教授
吉岡 乾
比較文化学専攻 准教授
檜永 真佐夫
地域文化学専攻 教授
原 大介
豊田工業大学 工学部 教授
桐生 和幸
美作大学 生活科学部 教授

博士論文の要旨

氏 名 相良 啓子

論文題目 日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史的変遷—数詞
および親族表現に着目して—

本研究は、日本手話と、日本手話と系統的に関連のある台湾手話、韓国手話の3言語（以下、「日本手話系の言語」とする）について、数詞および親族表現を記述し、その記述に基づいて音韻、形態、そして意味の観点から語彙の変化の特徴を明らかにするものである。これらの言語は、1945年以降に日本手話から分岐したことが知られている。本研究では、対象となる語がどのように表現されるかについて、①分岐前と後の日本手話系の言語に関する史料、②現在の高齢話者の記憶に残る手話や各手話話者に「古い」と認識されている表現、③それぞれの言語で現在使われている表現に関するデータをまとめ、それに基づき日本手話系の言語における変遷の経緯を明らかにして特徴をまとめ、考察する。

より具体的には、以下の3つを研究課題とする。

- 1) 1900年代から1960年代までの日本手話と現在使われている日本手話、台湾手話、韓国手話を比較して、数詞および親族名称における形の違いをまとめる。
- 2) 分岐後、3つの手話言語がどのように変化したのかを明らかにする。また、語彙の形の変化と意味の変化の両方について記述する。
- 3) それぞれの変化について、現在の話者が使う語の地域差や年齢差との関連を調査し、変化の全体的な流れを検証する。

まず第1章では、本研究の目的を示し、日本手話系の言語が分岐に至った歴史的背景、言語の変化に関する先行研究をまとめ、これまで明らかにされてきたこと及び問題点を整理した。また、本研究における調査方法および記述法について述べ、対象となる言語のデータにおいて意味の弁別に関わる部分、すなわち、音素単位による表記法を確立した。

第2章では、数詞のうち「1」～「9」、「10」「100」「1000」とその倍数、二桁～四桁の組み合わせの数を取り上げ、1900年代から現在にわたってみられるさまざまな表現を記述した。2012年から2018年にわたって行ってきたフィールド調査では、特に高齢話者から以前使われていたとされる古い手話表現に関する聞き取りも行った。さらに、これらのデータに基づき、史料における記載も参考にしながら、変化がみられる例を取り上げてその変遷を分析した。分析にあたっては、わかりやすく記述するために、数をその形態と構成に分けて検討した。本稿では、数の形態と構成に基づき、「一形態素からなる数」「縮約型」「加算型」「同時・乗算型」「継時・乗算型」「デジタル型」の6つに分類した。形の変化と意味の変化の両方について記述し、主に数詞の形にみられる変化の特徴をまとめた。意味の変化については、現台湾手話の「10」「100」「1000」においては意味の縮小がみられること、また、現日本手話の「100」とその倍数においては、意味の拡大がみられることを示した。

第3章では、親族表現について焦点を当て、「男」「女」「父」「母」「兄」「弟」「姉」「妹」

「兄弟」「姉妹」「祖父」「祖母」「息子」「娘」「夫」「妻」「伯父」「叔父」「伯母」「叔母」の20語について記述した。第2章と同様に、1900年代から現在使われている表現を記述し、変化がみられる例を取り上げて、音素記号を用いて語彙の変遷を示し、分析した。

第4章では、数詞および親族表現の変化の中で共通してみられた6種類の音変化についてまとめた。これらは、親指の中和、簡略化、消失、融合、同化、両手化・対称化である。また、語が入れ替わったことによる変化、パラダイムの中に部分的に変化がみられる水平化について述べた。中和、簡略化、消失、喪失、融合、同化、水平化、語の入れ替えは、音声言語にも手話言語にもみられる変化である一方、中心化、両手化・対称化など、手話言語独自にみられる変化があることを示した。

第5章では、現在の日本および台湾における話者層による使用表現の違いに、統計的な有意差があるかどうかについて調査した。地域および年齢と実際の使用語彙との相関について明らかにし、語彙使用の変化のあり方について考察した。数量的分析を可能にするため、現標準日本手話の二種類の表現に対象語彙を絞った。それらは、親指とその他の指の先を接触させて「ゼロ」に見立てて桁の違いを表現する数および継時・乗算型で表す数とその倍数（ここでは「Z系」の表現とする）と、同時・乗算型の数とその倍数である。その結果、現在使われる日本手話と台湾手話には共通する分布状況があることがわかった。すなわち、歴史的に関係が深い大阪を中心とした近畿と台南では、同時・乗算の表現よりもZ系の表現を使う頻度が高く、いずれも高齢の話者に、より多くみられる傾向があることを統計的に示した。一方、東京を中心とした関東と台北では、いずれも同時・乗算型の頻度が高く、「10」についてはどちらの地域でもZ系の表現はみられなかった。その一方で、関東では「1000」で、台北では「100」でZ系が使われる頻度が高く、それぞれ語は異なるものの、一部でZ系を好んで使う傾向があるという共通点がみられた。このように、第5章では、数量的なアプローチにより、変化の実態を現状に基づいて把握できることを示した。

第6章では、本研究の結果および明らかになった変化についてまとめた。また、本研究における学術的な貢献および今後の課題について述べた。

本研究では、分岐後に、それぞれ言語および文化が異なる社会背景の中で発達してきた言語の比較を行い、その中で、共通する変化や異なる語彙の発達過程を示すことができた。数詞および親族表現の言語変化に関する比較再建を行うことにより、手型、動き、および位置に属する音素が主な構成素となっている語彙体系の歴史変化についても明らかにした。また、手話言語においては、写像的な表現が音声言語より多い印象を持たれているが、写像的な表現からできた語であっても、使われていくうちに抽象化が進み、言語の仕組みの一部として機能する方向に変化する。これまでの歴史言語研究においては、恣意性が比較のための重要な要素であると考えられてきたが、本研究により、恣意性の高低により、比較の対象となる語彙を区別せず、その発達経緯を検証する必要性があることを示すことができたと考えている。

本研究は、これまで、地域によりさまざまな表現があることが知られていたが、その実態が知られていなかった日本手話系の言語の史料における記述から現在にわたるデータをまとめた初めての資料となる。また、これまで主にアメリカ手話に限られていた言語変化の様相の詳細を、日本手話系の言語について明らかにした初めての研究でもある。加えて、

手話言語の変化を記述するためには、音素という概念が重要であることを示したという点で、初の試みでもある。ここで分析対象とした語彙は限られてはいるが、今後、手話言語学において広く、歴史言語学的研究を進めるための土台を提供できたと考えている。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 相良啓子

Title
論文題目 日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史の変遷
—数詞および親族表現に着目して—

本論文は、日本、台湾、韓国で使われている手話言語（論文中では「日本手話系の言語」と称される）を対象として、記述言語学的、また歴史言語学的に分析したものである。この言語群にみられる数および親族表現に焦点をあて、地域による違いを含めた記述を行い、さらに史料に記録されたデータと自身の記述データに基づき、それぞれの言語にみられる歴史変化のプロセスを明らかにした。

ここで対象となる言語のうち、台湾および韓国で使われているものは、20世紀初頭に、当時東京および大阪で使われていた日本手話から分岐し発達したことが知られている。これらの言語と日本手話との間にある表現の違いについては、長く、手話関係者の間で認識されていたとはいえ、それらの詳細に関する学術的分析はなかった。本論文は、それぞれの国で一般的に使われる手話言語（いわゆる「標準手話」）だけではなく、それぞれの国の地域間でみられる異なる表現についても丁寧に収集し、その具体的な類似性と相違点を言語学的に明らかにした成果である。のみならず、記述された表現を歴史言語学的に比較することで、分岐した当時の表現とその後の変化のプロセスを解明するための方法論を提示し、手話言語を対象とした歴史言語学的研究の確立への第一歩を目指した意欲的成果でもある。

手話言語の言語変化については、これまでアメリカ手話を中心とした一部の手話言語における限られた語彙のみについて、しかも主として映像資料があるものについてのみ報告されていた。これに対し、相良は、音声言語学における比較再建の方法を参考にしつつ包括的な分析に取り組んだ。その中で、これまでの手話言語研究において広く使われてきた音韻パラメータの不十分性を実際のデータ分析の中で示し、またその解決策としてあえて手話表現の音素分析に取り組んだこと、また、対象とする語彙を絞り込み、その比較をすることで、手話言語においても歴史言語学的研究が可能であることを示した。これらは、今後の手話言語分析に大きな変革をもたらす可能性をもつ研究として、その学術的意義は大きい。

論文は、結論を含めて全6章から構成される。

序論にあたる第1章ではまず、研究の目的、用語の定義、歴史的背景および先行研究、そして、本研究における調査および記述の方法が述べられている。このなかでは、これまでの手話言語学で用いられてきた用語を一般言語学の文脈で整理していること、また、記述の方法において、これまでの手話言語学で用いられてきた音素の概念では記述が十分にできないことを指摘し、本研究目的に沿った記述方法を提示している。

第2章では、一桁から四桁までの基数の表現を対象とし、数のまとまりごとに記述、お

よび変化の分析をしている。数の表現では、指の形、手のひらの向き、手の方向、手の動きが表現を構成する要素となっており、そこに絞って観察するのが目的となっている。そのうち第1節から第7節では、一桁の数、10の倍数、100の倍数、1000の倍数といった、単独の数の記述と分析、第8節から第11節では、これらの組み合わせにより表現される二桁、三桁、四桁の数に実際にみられる具体的な組み合わせと変化、またそこにみられる方向性や制約について指摘している。

第3章では、親族表現を対象とし、同様に、記述および変化の分析をしている。日本手話系の言語における親族表現では、数の表現にみられる構成要素に加えて「位置」という要素が入ってくるが、これを含めて分析している。

第4章は、第2章および第3章で記述した変化の内容のまとめとなっている。この中で、相良は、音声言語と共通する性質をもつ変化として、中和、簡略化および消失、融合、同化、語の入れ替え、パラダイムの水平化がみられること、手話言語固有の変化としては、両手化および対称化、中心化など、空間に関わる変化があることを示している。本論文の記述対象以外の表現例にも触れつつ、音声および視覚という違いを持つモードの異なる言語の変化における共通点と相違点を整理したものとなっている。

第5章では、第2～4章でみられた変化の一部について、数量的方法による裏付けを試みている。「10」「100」「1000」に関連する二系統の表現を対象として自然発話における出現頻度と地域、話者の年代、性別との相関について確認した。地域としては、日本では関東圏と近畿圏、台湾では、東京から分岐した台北、および大阪から分岐した台南の手話言語を対象とし、これらの分岐後、並行して発展した東京と台北、大阪と台南の変化の状況が類似していることを数量的に示している。

第6章では、結論として、本研究で明らかになった変化、学術的な貢献、および今後の課題を述べている。

本論文は、日本手話系の言語に関する歴史言語学的研究の先駆的業績として高く評価できる。その要点は以下2点である。

- 1) 日本手話系の言語(各種日本手話、台湾手話、韓国手話)において構成音素が手の「形」、「動き」、「位置」に限られる数詞と親族名称の語を比較検討することで、その系統変化の特徴を体系的に示したこと
- 2) ストーキーら(1965)による手話の記述法(ストーキー法)を批判的に検討し、音素間の比較と言語変化の記述が可能な新しい記述法を提案し、これによって手話言語の歴史再建の方法論を確立する端緒を拓いたこと

その一方、ここで得られた音素に関する観察がひとつひとつの事例の分析を超えて、どのように歴史的な比較全般に活かされ得るのか、より総括的な視点からの議論がなされていないこと、また、韓国手話に関するデータが限られているなど、不十分な点も残されている。しかしこれらは、手話言語研究の現状を鑑みると、一論文で解決できる内容ではなく、本論文の価値を損なうものではない。今後の調査・研究の継続によって、より高みを目指すなかで十分解決していただきたい内容である。そのことも含めて、本研究は、手話言語学研究、とくに歴史言語学的研究への今後の大いなる貢献が期待される。

これらを総合的に検討し、審査委員は全員一致で本論文が学位論文に値すると判定した。